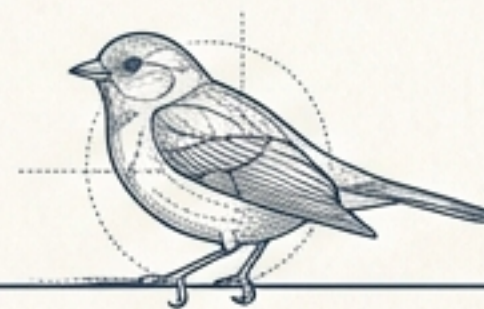
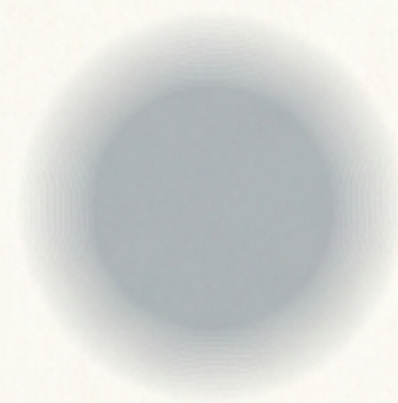


自由を守るための条件 自由を守るための条件

日本社会の「空気」と「心理」を解剖する



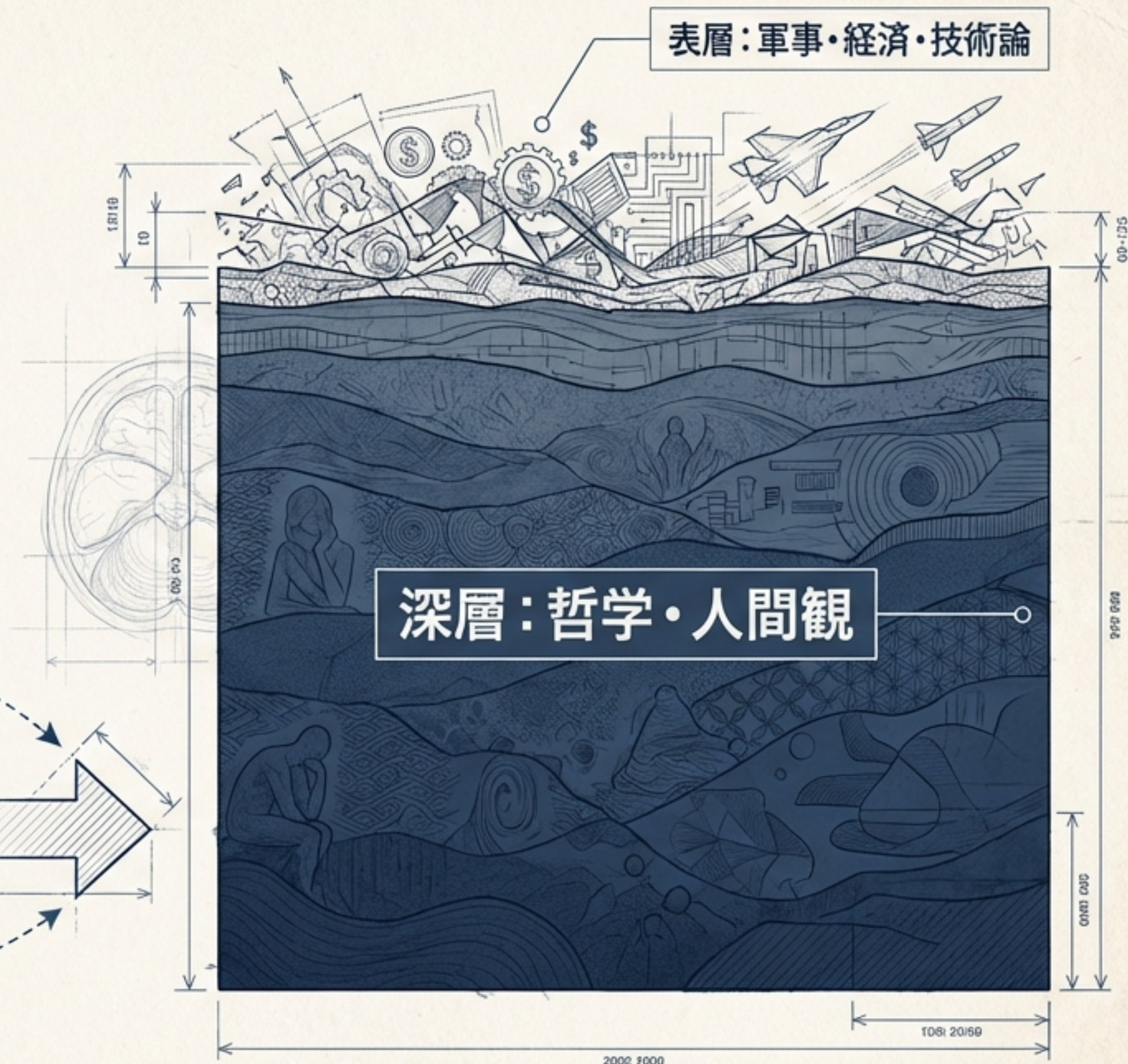
改憲論争の本質は 「安全保障」ではない

技術論の背後にある「国家観」と「人間観」の問い

改憲か、対米自立かという議論は、軍事・経済依存の
現実を前にすると容易に結論が出ない。

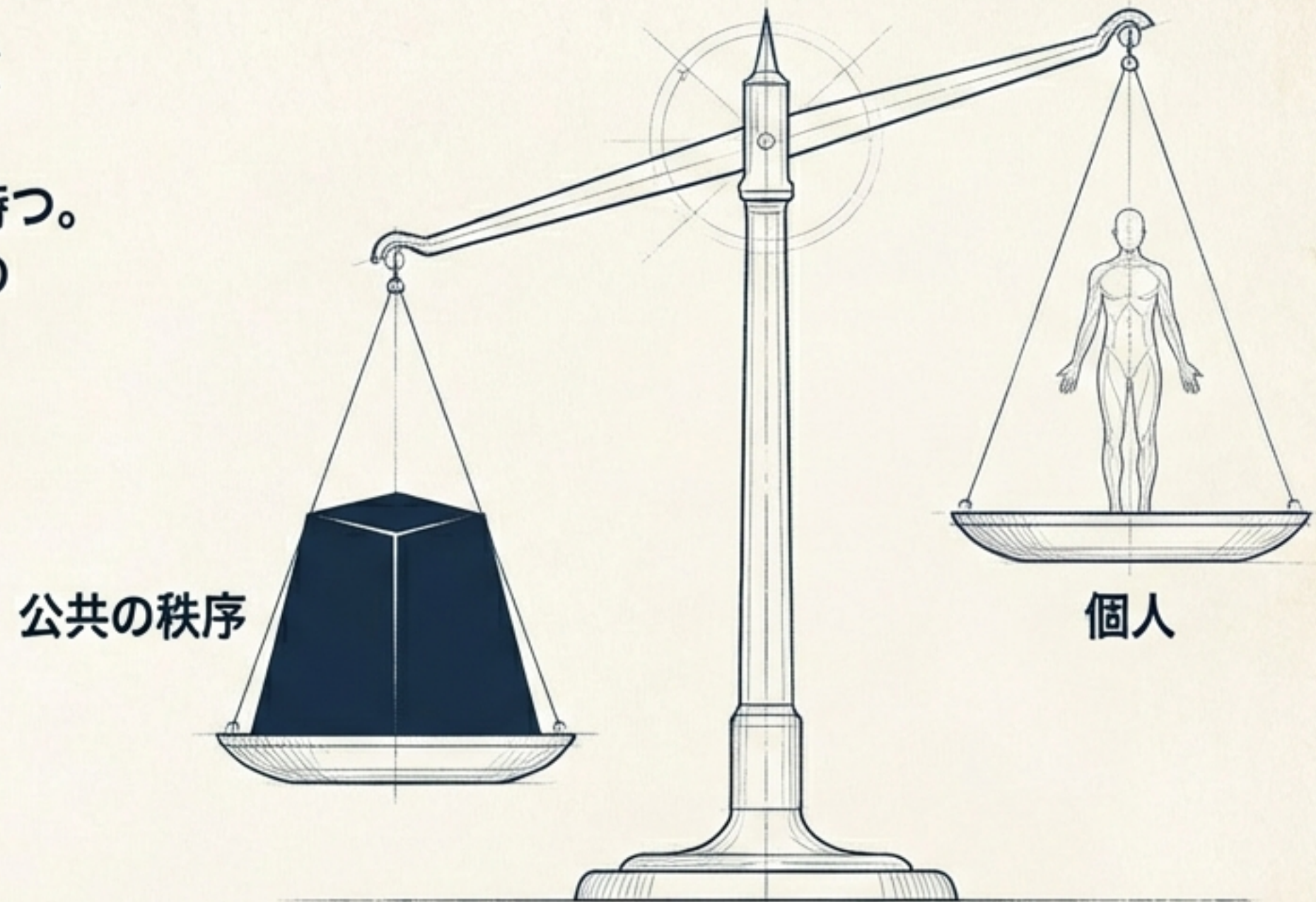
しかし、本質はそこではない。
問われているのは次の二点である：

1. 市民は国家にどこまで従う存在か？
2. 国家は市民をどこまで統合する存在か？



条文が規定する力学

憲法の言葉は抽象的だが、物理的な力を持つ。
条文の配置ひとつで、市民と国家の関係の
重心は劇的に動く。



公共の秩序

個人

「公共の秩序」を強調する
場合：国家は自由を
制限しやすくなる。

「個人の尊厳」を最高価値
とする場合：国家は個人を
守るための道具となる。

自由とは「不同意」の権利である

“自由の核心は、
賛成する自由ではなく、
不同意できる自由
自由である。”

- ・批判する自由
- ・拒否する自由
- ・沈黙する自由
- ・無関心でいる自由

思想・良心・表現の自由は、国家と一致しない権利を守るためにある。
民主主義の成熟度は、不同意者が安心して存在できるかで測られる。

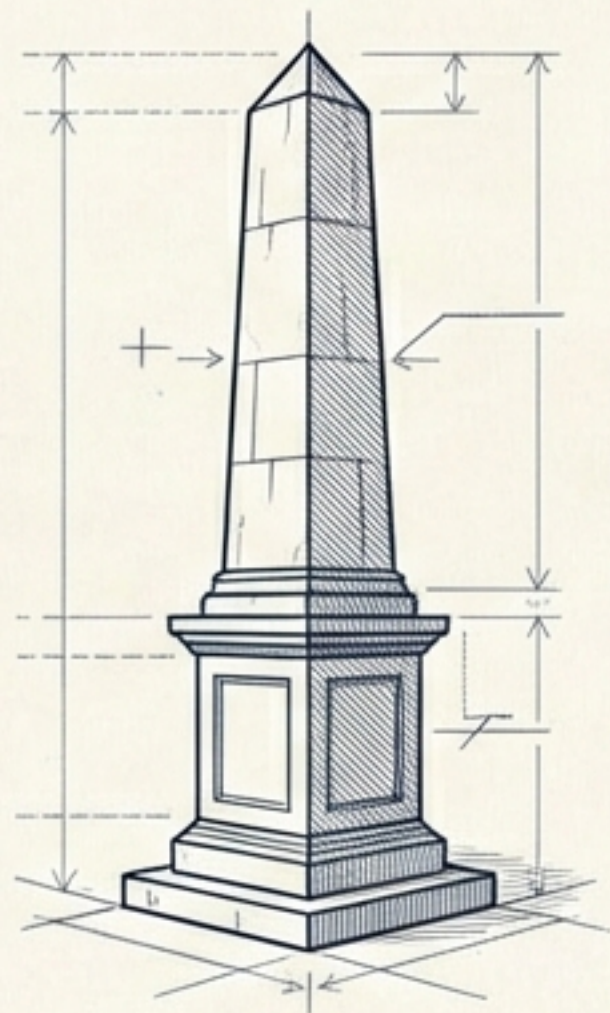
日本社会の二重構造：法と「空気」



「逆らえば排除される」という予感が内面化されると、
自由は形式だけ残り、心理的に発動不能になる。

曖昧な権威と内面化される統制

西欧 (The West)



闘争を通じて「法的父性」を確立。
権威は外部に存在する。

日本 (Japan)



家父長制は廃止されたが、精神構造としての「父性」は残存。
「空気」が優位となり、権威は曖昧なまま内面化される。

病理1：未成熟な主体と同一化



国家批判を
自己否定と感じる

国家は倫理の源泉となり、不同意は「非国民的」とみなされる。
外的統制よりも、内面化された統制の方が深く作用する。

病理2：国家主義と従属の逆説

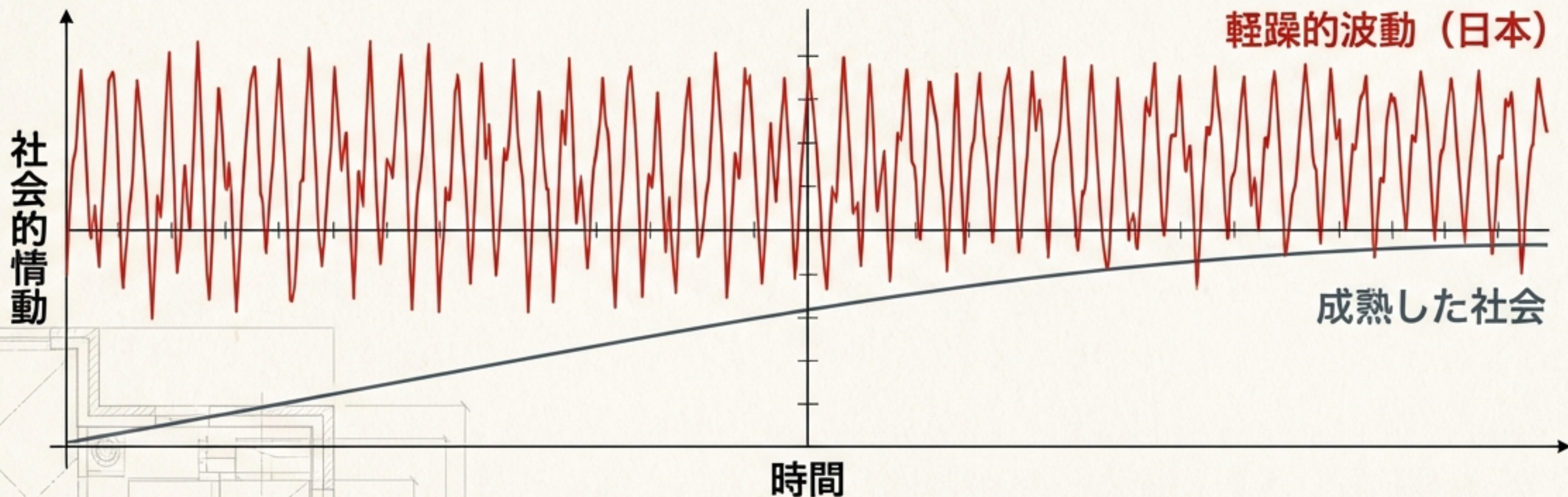
- 主体が自律していなければ、個人は国家に依存する。
- しかし、その国家が安全保障で他国に依存していれば、個人は間接的に従属構造へ組み込まれる。
- 国家主義が強まるほど自立国家になるとは限らず、むしろ従属が固定化される可能性がある。



社会診断：「軽躁」 国家仮説

長期停滞の中で、日本社会は「うつ」ではなく「軽躁的波動」を示している。

- ・強い言葉が好まれる
- ・単純な物語が安心を与える
- ・調整型政治は「退屈」とみなされる



不安と単純化の罠

加速装置 (SNS)

短い言葉と「敵・味方」
の構図を優遇する。
熟議を衰退させる。



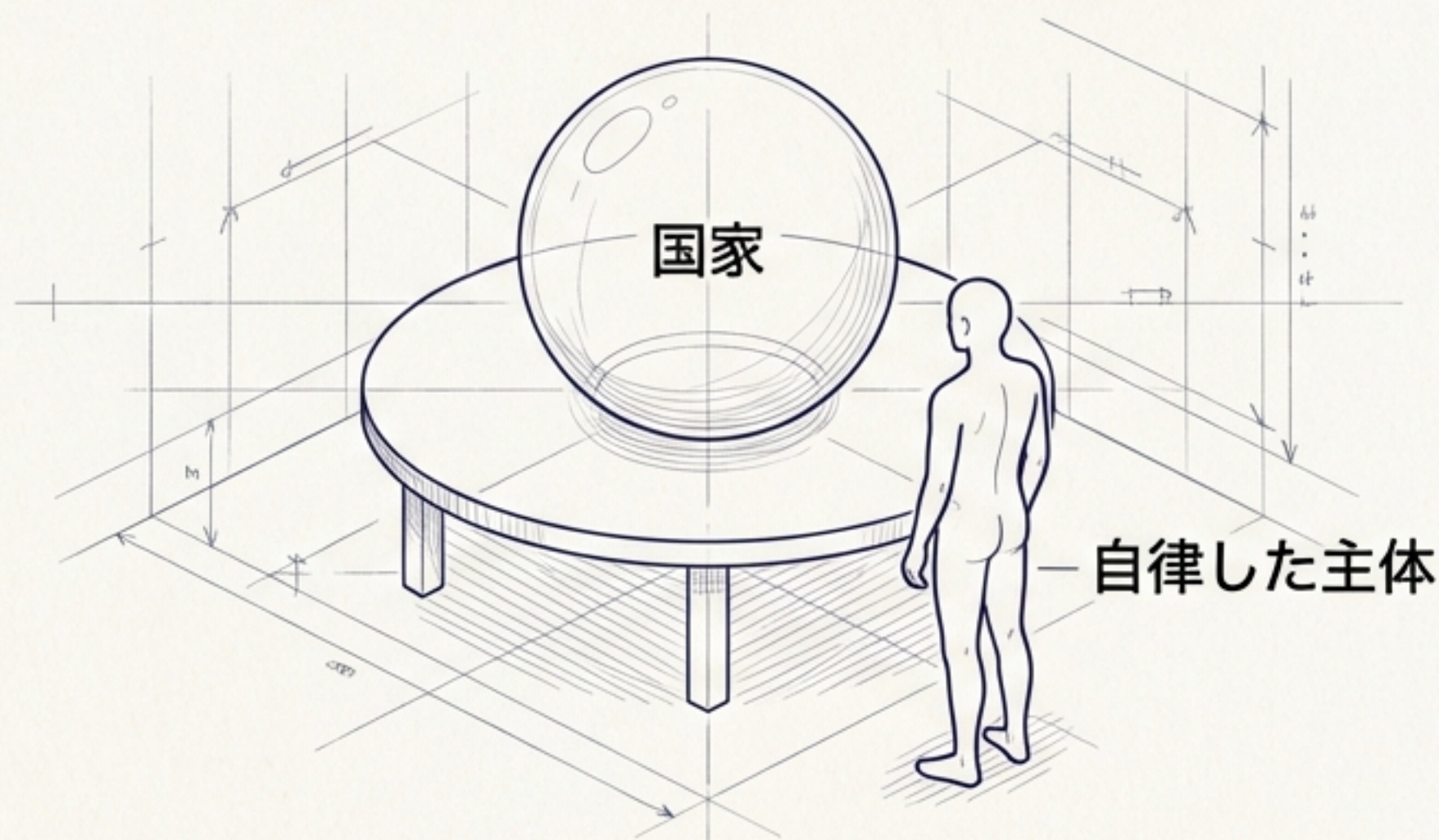
心理的効果

不安は世界を単純化し、
強いリーダー像を
魅力的に見せる。

これは日本固有の問題ではなく、現代の時代的傾向である。

自由の条件：国家の相対化

最も危険なのは国家そのものではなく、
「国家と同一化しなければ不安になる心理」である。



処方箋：

1. 自由とは、国家を相対化できる主体の存在を前提とする。
2. 国家への「不同意の自由」が守られるときのみ、公共は成立する。

いずれ自由が輝くために

「空気」の支配からの
心理的脱却

安易な「敵・味方」の
物語への拒絶

不同意者を許容する
成熟した社会へ



「自由は、まずあなたの心の中で成立しなければならない。」